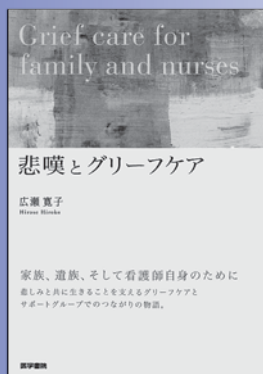


体験の「核」に届く思いを伝える1冊

【評者】岸本寛史 京都大学医学部附属病院地域ネットワーク医療部

悲嘆とグリーフケア

広瀬寛子(著)



定価 2520 円
(本体 2400 円+税 5%)
医学書院
(Tel.03-3817-5657)

渾身の1冊である。冒頭で広瀬先生ご自身の体験が圧倒的な迫力をもって語られている。緩和ケアに限らないが、医療の道を志すのには人それぞれさまざまな思いがあることであろう。しかし、その視線は眼前の患者に向けられることはあっても、同時に自分自身に向けられることは多くない。それはつらい作業であり、蓋^{ふた}をしてしまうほうが楽だからである。広瀬先生は、そこに蓋をせず、しっかりと見つめることから本書を始めている。「私は書くことにしました。……グリーフケアにかかわっていく以上、決して葬り去ってはいけないことだとも思っています。一生かかっても払拭できない荷を、人は背負っていかなければならないのだと思うのです」という著者の言葉から、その覚悟が伝わってくる。

こうして、深いところを動かされた余韻をもって第1部を読み進めると、イントロ部分との落差のようなものを感じ、心がついていくのに少し時間が必要であった。これについていろいろと考えてみたが、第1部の冒頭では遺族の語りが紹介されていて、非常に具体的な内容が示されているが、それぞれの語りは具体的なコンテキストから切り離され、項目ごとに分類整理されている中に埋め込まれている。そのため、語りそのもののもつ力が削がれて、著者の概念体系を示す一例として提示されているからではないかと感じた。たとえば、イントロの部分は、読み手の腹の底に直接語りかけてくるような、魂の叫びのように感じられ、それが第1部に入ると急に頭に働きかけるような形となり、急浮上するため、潜函病のような苦しさを感じられるのではないかと思った(これはネガティブに批判しているのではなく、それぞれの文章の違いについて中立的に述べたものと受け止めていただきたい。いずれのスタイルも大切な書き方であるとは私は思っているがそのギャップを意識しておくことは大切だと思う)。

緩和ケアの多くの研究は、頭に働きかけることはあっても、腹に働きかけるものは少ない。それは研究というもののもつ宿命であろうか、あるいは研究の方法によるのであろうか、筆者にはよくわからない。ただ、知識を伝えたり、標準的なやり方を伝えたりということも大切なことではあるけれど、著者のように、体験の「核」に届くような思いを伝えることが、結局は書物を書くことの根本ではないかと思う。その意味で、本書は実に意義深い書物だと感じる。

本文は、イントロを除くと、遺族、家族のためのグリーフケアと、看護師自身のグリーフケアという大きな2本の柱からなっている。あとがきで「2冊の全く別の本を書いているような」気持ちと述べられているが、私はこの2本の柱はコインの表裏のように、切り離せるものではないと思う。さらにそこに「自分自身」への眼差しを入れようとする著者の取り組みは、現在、緩和ケアにおいて、目を逸らしてしまうことの多い暗部に踏み込もうとする意欲的な書物である。